

百団大戦について——『彭德懷自述』より

(訳) 田中哲哉

1940年2月、国民党の第一次反共攻勢に対する勝利を獲得してからは、敵傀儡軍は華北地区においてデマをもって大衆を惑わし、特に八路軍と地方の民衆との関係の悪化をねらった。例えば、「八路軍は出撃したことがなく」、「同士討ちに専念して日本軍を攻撃しない」などといった類のデマである。一部の人々はこのわなにはまり、八路軍に対して疑問をもつようになった。国民党は「歪曲された救国論」で部隊の一部を降伏させて傀儡軍を組織し、ひそかにその合法化を承認してしまった。

当時、日本軍は正面進攻をやめ、華北に兵力を集中的に移動させて、後方の根拠地に対する絶え間のない「掃討」を進めていた。日本軍、傀儡軍はいくつかの交通線によって我が根拠地に対抗する占領区を拡張し、その拠点を増やしていった。同時に、日本軍は軍事的進攻のほかに政治的懐柔、経済封鎖、文化欺罔などの多面政策をとった。日本軍のいわゆる「治安強化」⁽¹⁾ 政策の推進後は、傀儡軍はその組織を拡大して占領区を拡張し、我が根拠地は縮小され部隊の休養補給に困難をきたすかに見えた。日本軍は各根拠地を封鎖してそれらの連絡を途絶させ、特に晋東南に対しては「籠の鳥政策」⁽²⁾ を実施し、形勢は日ましに厳しくなっていた。敵はその拠点のいたるところで略奪して「三光」政策を実施し、人民は重大な被害を受けるにいたった。

広範な人民大衆にとって、敵に重大な打撃を与えることは切実な要求であった。いくつかの地区では、敵の厳しい威嚇のもとで、最悪の場合には動揺して敵に投降するものまであらわれた。1940年の3月前後から7月までの間に、華北の抗日根

拠地はその大部分が急速に遊撃区へと変わっていった。大襲撃破壊戦の直前には、太行山の平順と晋西北の偏関の二つの都市を残すのみとなった。その結果、大衆にとってそれまで一つですんでいた負担が二つ（抗日政府に対する負担と傀儡政権に対する負担）に増えることになった。

国際的には東方ミュンヘン協定の危険が増大したことで、敵占領区の人民、特に知識分子に影響を与えた。

しかし、敵傀儡は我が根拠地に深く入りすぎ、トーチカを増やすことで兵力を分散させ、かえって敵後方の後方を形成することになった。特に交通線に対する疎漏は守備力を激減させ、これがわれわれにとって有利な戦機の一つになった。

これらはすべてこの戦役への準備を促進させる原因となった。

また、敵の動向に対する観測が誤っていたことも、この戦役発動の重要な原因の一つである。当時は、国際状況の変動により西南部の国際交通路線⁽³⁾ が遮断されて国民党の動揺を招き、敵もまた「8月西安進攻」という雰囲気をつかみ、西北部の交通路線も遮断されるのではないかと考えられていた。このような緊張の中で、国民党はさらに動揺を続け、投降してしまう危険性を強めていた。

このような状況のもとで、われわれは一大破壊襲撃戦を計画したのである。八路軍総司令部は、7月上旬に準備を開始し8月上旬の高梁が生い盛りの時期を利用して大破壊襲撃戦を行うと決定していた。当初の予定では、兵力は22個団（晋察冀10個団、一二九師8個団、一二〇師4個団）とし、重点的に正太鉄道をつぎに平漢鉄道、同蒲鉄

道北部および白晋鉄道（白圭から晋城までの鉄道を現在は存在しない）を破壊襲撃することになっていた。また、「8月13日」前後に敵の他の交通線に向けての進攻を開始する計画もたてられた。任務は、太行山区では娘子関から太谷までと石家荘から新郷まで、五台山区では石家荘から蘆溝橋までと娘子関から石家荘および南口東西部まで、晋綏区では太原以北から雁門関北部まで、太岳区では白晋路全部、冀南区と冀中区では石家荘から德州全部までにそれぞれ分担された。

総司令部の決定後、7月22日に各区と軍事委員会に電文を発した。破壊襲撃戦開始の時点では日本軍、傀儡軍は相当の兵力を我が根拠地から撤退させると予想されたため、各軍区と軍分区にそれぞれ指令して予め準備をさせ、敵の撤去工事の時を利用し一気に敵を殲滅してトーチカを破壊するよう配備した。各区はこの配備命令を受けると直ちに積極的に行動し、予定より早く準備を完了してそれぞれの担当地区へ進出していった。ちょうど高粱が青々としげっていた時で、敵がいかにトーチカをはりめぐらそうとも発見されることはなかった。

しかし、事前に発見されることを未然に防ぎ、同時に急襲して敵を恐慌に陥れるため、予定の日時を10日ほど繰り上げ7月下旬に戦端を開くことになった（百団大戦は8月20日開始）。このため軍事委員会の承認を待たずに（実はそうではないのだが）予定より早い戦闘に突入したのである。

初戦で勝利をかちとってからは、各根拠地においても少なからぬ武装勢力が敵の撤退の混乱に乗じて戦闘に参加して、自然発生的に敵への追撃を開始し、初めに配備していた22個団が104個へとふくれあがった。このため、戦報発表のときこれを百団大戦と称したのである。これは、共産党指導下の軍隊が高度な自覚と積極性をそなえていたことを表わしている。日本の華北方面の司令部ではこれを心理戦と呼び、以後この日を心理戦記念

日と称するようになった。

この戦いで死傷した日本軍、傀儡軍は合わせて3万余人に達し、自ら四散していった傀儡軍および傀儡組織はこれよりはるかに多かった。正太鉄道と平漢鉄道は復旧に1カ月以上を要した。この戦いによって多くの県を奪還したが、失ったものもあった。襲撃破壊の時点では40～50県にも及んだが、最終的に強固なものとしたのは26県以上である。太行山区では榆社、武郷、黎城、涉県、陵川、襄垣の6県、太岳区では沁源、浮山、安沢の3県、五台区では阜平、靈邱、涞源、渾源の4県、晋西北では臨県、興県、岢嵐、嵐県、五寨、平魯、左雲、右玉の8県、冀中では河間など数県、冀南区では南宮など数県、冀魯豫平原区では南楽、清豊、内黄などの県をそれぞれ回復したのである。この点からみても、日本軍、傀儡軍に与えた影響は非常に大きかった。当時、敵は我が根拠地内部に深入りしすぎていて、盤上の基石のように設置した堡壘に分散して各鉄道沿線の守備は手薄になっていたため、戦いの開始時期には我が方は比較的順調に戦闘を進めることができた。

この襲撃破壊戦では敵の交通運輸に手ひどい打撃を与え、傀儡軍とその組織に相当の死傷者を強い、我が根拠地内の敵の少なからぬ堡壘を破壊し、多くの県を回復し、また大量の物資を鹵獲したが、抗日戦争中この鹵獲物は最大のものであった。

この戦いは華北人民大衆の敵後方における抗日勝利の自信を大いに高め、日本軍の懐柔政策および東方ミュンヘン⁽⁴⁾の陰謀に大打撃を与え、蔣介石支配区の人民に大きな興奮を呼び起こした。また、投降派にも打撃を与えて共産党の指導する抗日部隊の威望を高め、国民党の捏造したいいわゆる「出撃したことがない」というデマにも打撃を与えた。蔣介石には後方補給と国際援助があったが、八路軍は敵後方の深部にあって何の援助も受けず、大局的見地から百団大戦を遂行するべく、抗日救国の神聖な事業を自らの任務としたのである。そ

して、全国人民にその評価を委ね、自らを教育していった。日本に対する大規模な襲撃破壊戦の中で我が軍が強襲の経験を積んだことは、その後の敵後方における武装工作隊の活動の展開を有利にすることになった。華北の傀儡軍とその組織の中でも、破壊工作は急速に展開していった。広範な解放区の回復は二方面への負担という局面を変え、人民の苦痛を軽減することになった。

この勝利のニュースが延安に達したのち、毛主席が私に寄せた「百団大戦は人々を感激させたが、このような戦闘を再び行えるかどうか」という電文からも、この戦いが大きな勝利を勝ちとったことができる。

しかし、この問題について私の誤りは、主として日本軍がどの方面から進攻してくるか正しく判断できなかったことである。もともと、敵は中原への進攻と粵漢鉄道と湘桂鉄道の開通を準備していたため、私は（われわれの情報工作者の報告にもとづいて）敵が西安へ進攻し、西安占領後中央（延安）と西南地区との連絡を遮断することをおそれて（実際にはこの種の考慮は不要であった）、日本ファシズムが粵漢鉄道を開通させるのは太平洋戦争遂行のための便宜を図るためだということが見抜けなかった⁽⁵⁾。当時、もし敵のその企図を看破してあと半年辛抱していたならば、あるいは敵が長沙、衡陽、桂林占領後にその兵力をさらに分散させるのを待って大規模な襲撃破壊戦を決行していたならば、その結果はさらに大きくまたその意義もさらに重要なものとなったかもしれない。しかし、実際にはこの戦いは時機尚早であった。戦闘で勝利を得たとはいえ、日本軍による粵漢鉄道と湘桂鉄道開通時期を遅らせて（約1カ月）日本軍の蒋介石に対する圧力を軽減させてしまった。客観的には蒋介石を援助する結果になってしまったのである。この襲撃破壊戦により、敵は華東、華中から1個師団の兵力を移動させ、我が華北根拠地に対する進攻を強化するようになった。特に

太行山区では、敵の三光政策（殺し尽くし、焼き尽くし、掠め尽くす政策で1939年夏から実施）のもとで、人民は本来なら避けられる損害までこうむることになったのである。さらに、この戦いの後期には私はむちゃな指揮をしてしまった。太行山区における襲撃破壊の期間が長すぎて連続1カ月にも及び、その間休養の時間もなく、また敵もただちに掃討をもって応じた。掃討を行う場合、日本軍はその1個大隊に傀儡軍を従属させるのが常であった。私は、機会をとらえてこれを殲滅させれば、敵は次の掃討には大隊を用いず、各掃討間の時間も長びいて我が軍民の行動に有利になると考えていた。しかし、私の考えは当時の実際の状況にそぐわなかった。部隊はあまりにも疲労しており、これが戦闘力を低下させ一二九師に多数の死傷者を強いることになってしまったのである。

上述の結果についての責任は、当然私が負わねばならない。しかし、私は、この戦いについての評価は当時われわれの置かれていた環境と課せられた任務から切り離して考えることはできないと思う。もしも、これらを見做して一方的に「蒋介石の支配を擁護するため」とか「ブルジョア思想の戦略方針」ときめつけるならば、この戦いについてのそのような分析と推論は行き過ぎであると私は考える。なぜなら、その勝利は実際の損失に比べればはるかに大きなものであったからである。

文化大革命中、百団大戦を悪意をこめて攻撃する人々がいた。彼らは、皖南事変⁽⁶⁾は百団大戦が我が軍の力を暴露してしまつて蒋介石の進攻を招いたことに原因があり、新四軍7000～8000人を死傷させた罪は彭徳懷が負わねばならないとした。冗談ではない。この人々は一体どんな立場でものを言ったのか。根本的に歴史を理解していないのではないか。百団大戦が発動されたのは、蒋介石による第一次反共攻勢の後であつて、その前ではない。その前に八路軍、新四軍に対してあのような虐殺事件を引き起こしたのは一体だれなのか。

さらにひどいのになると、日本が降伏した後になって、蒋介石が人民解放区に対して未曾有の進攻をしかけたのも、百団大戦が我が軍の実力を暴露して彼に警戒させるのが早すぎたことに原因があるという人もいる。その人々は健忘症なのか、それとも歴史の事実を無視するつもりなのか。1927年の上海の「四・一二」事変と長沙の「馬日事変」で事前に実力を暴露してしまったのは誰だったか。「四・一二」事変前に誰が百団大戦を起こしたのか。蒋介石は十年内戦を続行させたが、その十年内戦前に誰が百団大戦を指揮したのか。誰もできなかったはずである。それでは、蒋介石集団はなぜ十年内戦を起こそうとしたのか。それは、この集団が地主買弁ブルジョアジーの本性を代表して決定したものだったからである。それは反共反人民の代表集団であり、抗日戦争の期間を通じて三次の反共攻勢を行い⁽⁷⁾、抗日戦争終了後も数百万の軍隊を擁し、また帝国主義の援助もあったため、どうして反共反人民でない道理があるのか。どうして解放区へ進攻しなかった道理があるのか。

百団大戦に対して悪意をこめて攻撃するならば、それは日本帝国主義と蒋介石集団の隊伍に加わることに同じである。上述の毛沢東が私に寄せた電報を見ていただきたい。どうして毛沢東と同じ見方ができないのか。講演の壇上で、どうして力をこめて彭徳懷打倒を叫ばなければならないのか。それともすべてを打倒してしまうのか。ちょっと考えていただきたい。2～3人で部屋で雑談するのではなく、何回にもわたって数万の大衆の大会で講演し、毒をまきちらしてきたことを。

私は、百団大戦は軍事的見地から起こすべきものであったし、特に内部対立に反対する戦いの後に起こされたことは、われわれが抗日のためには内部対立に反対しなければならなかったことを示していると考え。これによって、はじめて中間勢力を味方にすることができたからである。当時は敵後方の後方の空隙について敵を強襲すること

ではじめて敵を移動させることができたし、多くの根拠地を回復することができた。敵後方の堡壘が密集しているという状況の中で、このように計画的統一性をもった襲撃破壊は容易なものではなかった。百団大戦の勝利は、日本と蒋介石によるさまざまな欺瞞を暴露することについては有利さと効果をもたらし、力を蓄えておくことの必要性を立証した。もし、当時敵に対して必要で可能な打撃を与えていなかったならば、根拠地は遊撃区となり、われわれが百万近い正規軍と二百万の民兵を擁して広大な解放区を解放戦争のための戦場とし、侵犯する蒋介石軍に対して適宜な打撃を与えることはできなかったにちがいない。

抗日時期に人民戦争は発展し、紅軍のときに比べればさらに前進した。大規模な地下道戦、地雷戦、麻雀戦（ゲリラ戦の一種）のようなさまざまな戦術には、各種の武器が新たに利用されていた。武装、編成も多様になった。普通の民兵は、各村の小班、各区の区幹隊、各県の独立団、営、支隊によって組織されていた。百団大戦後は武装工作隊が発展したが、これは党政軍民それぞれの組織形式が統一され、その一般的政策のレベルは高く、状況の具体的分析に長け、人民の利益のためにさまざまな着想をこらし、合法闘争と非合法闘争を組み合わせることについては格別の妙を得ていた。これらは毛沢東の人民戦争思想によって指導され、次第に成長したものであるが、惜しむらくはまだ系統的に整理されていない。

〔注〕

(1)1941年3月より、華北の日本軍と漢奸によって行われたいわゆる「治安強化運動」は、解放区に対する掃討、遊撃区における「大檢舉」、占領区における「保甲制度」の採用による戸籍調査、傀儡軍組織化などで抗日勢力を鎮圧しようとするものであった。

(2)籠の鳥政策は、日本帝国主義が我が軍の殲滅

と後方の根拠地の破壊を企んだ残酷な手段の一つである。これは、鉄道を中心として道路、堡壘を従とし、補助的に壕、防壁を封鎖することで我が根拠地の軍民に対して網状の包囲をめぐるせるものであった。

(3)西南国際交通線とは雲南・ビルマ公路で1938年全線開通した。雲南省の昆明から楚雄、下関、保山、潞西を経て畹町に至り、インド・ビルマ公路に通じる。抗戦時期には我が国と外国との連絡を保つ重要な交通線であった。1940年7月17日、イギリスは日本帝国主義の圧力に屈し、雲南・ビルマ公路の封鎖を宣言した。

(4)1938年9月、英、仏、独、伊四国政府首脳はドイツにおいてミュンヘン会議を挙げてミュンヘン協定に調印し、チェコスロバキアをドイツに売却してドイツがソ連へ向けて進攻するための交換条件とした。1938年から1939年まで、米英帝国主義は中国を売却することで日本帝国主義と妥協する雰囲気をつくりだした。この陰謀は上述のミュンヘンにおける陰謀と類似しているため、「極東ミュンヘン」とよぶ。

(5)1941年12月7日朝、日本は宣戦布告をせず強力な海空軍をもってアメリカの太平洋の主要な海空軍基地である真珠湾を急襲し、アメリカ艦隊に重大な損害を与えた。12月8日、米英両国は日本に、ドイツはアメリカに正式に宣戦を布告し、太平洋戦争が開始された。

(6)1941年1月、皖南の新四軍は国民党当局の同意をとりつけて皖南の北に移動したが、安徽涇県茂林鎮で国民党軍の突然の包囲攻撃を受け、7昼夜の血戦の末、軍長葉挺は捕虜となり9000余名の指揮員、戦闘員は少数の例外を除いて勇敢に戦死し、内外を震撼させた皖南事変が勃発した。

(7)1938年10月武漢を失ってから、蒋介石の国民

党は政策を変更し、その重点を消極的抗戦と積極的反共へと移していった。1939年冬から1943年秋までに、蒋介石の国民党は3次の大規模な反共攻勢をみせた。第1次は1939年冬から翌年の春まで、この間、国民党軍は陝甘寧辺区の5県を占領し、閻錫山は十二月事変を発動して青年抗戦決死隊を攻め、石友三、朱懷冰らの部隊は太行山の八路軍に対して進攻した。第2次の攻勢は1941年の1月で、この間、国民党軍8万余人が皖南から北へ移動した新四軍部隊を伏撃し、内外を震撼させた皖南事変を起こした。第3次は1943年春から秋にかけてであり、蒋介石は反共反人民である『中国の命運』という一書をかかげ、コミンテルン解散の機に乗じて特務を民衆団体と偽らせて「共産党を解散させよ」「陝甘寧辺区を取り消せ」と叫ばせ、多数の河防部隊を移動させて陝甘寧辺区を電撃させた。我が軍は効果的にこれら3次にわたる反共攻勢を退け、危機を克服した。

※原題「大破襲戦役（亦名百团大戦）」（『彭德懷自述』1981年、人民出版社所収。pp. 234～242）

(19頁からつづく)

(3)『彭総光輝的一生』79頁。

(4)(5)(6)『中共党史專題報告彙編』134～135頁。

(7)『中共党史專題報告彙編』138頁。

(8)同上141頁。

(9)『关于百团大戦的有關電報』7～8頁。

(10)(11)(12)『关于百团大戦的有關電報』2～5頁。

※原題「对百团大戦的一点看法」〔『覆印報刊資料 中国現代史』1981年№20所載、原載『錦州師範学院学報』1981年第2期〕